

# 都市型コレクションの有用性 19世紀フランクフルトの ゼンケンベルク自然誌博物館を例に

櫻井文子

## 1. はじめに

1832年の5月、ドイツ語圏のとある町の自然科学協会は、年次総会に集った会員や後援者たちの前で、協会の使命はもはや達成されたも同然だという大胆な宣言をした。

世の物事に等しく、人は一人であるものではなく、[中略]誰もが生まれつきの立場を与えられているものであり、慎重に慎重を重ねてはじめて、それを踏み越えて行動することが許されるのです。我々の協会は、与えられている立場をすでにかなりどころ得たように思われます。そして先だって始められた建築工事が完了すれば、協会の外面的な拡大は、協会の身の程に合った目標地点に遠からずのところにあることでしょう。[中略]もはや大胆な事業や大規模な購入よりも、すでにあるものを最盛期の状態で維持し、実力に見合ったやり方で次第に完成に近づけることこそが肝要なのです<sup>1</sup>。

問題の協会は、1817年にフランクフルトで自然誌の研究と教育のために設立された、ゼンケンベルク自然研究協会（Senckenbergische naturforschende

---

<sup>1</sup> 'Ueber Goethe als Naturforscher; zugleich Jahresbericht. (Vorgetragen am 6. Mai 1832.)' in Mappes, J. M. (Hrsg.), *Festreden gehalten im naturgeschichtlichen Museum zu Frankfurt am Main und als ein Beitrag zur Feier der 25 jährigen Stiftung der Senckenbergischen naturforschenden Gesellschaft am 22. November 1842*, (Frankfurt am Main, 1842), S. 147.

Gesellschaft) である。会員数 16 名のささやかな自然誌同好会として発足したこの協会は、上述の年次総会が開かれた 1830 年代始めには、ヨーロッパ有数の自然誌研究の拠点に様変わりしていた。1821 年に開館した同協会の自然誌博物館が、北アフリカの希少な動植物標本を大量に入手し、会員の手で数多くの新種が発見されたからである。

ゼンケンベルク協会の発展は、18 世紀の終わりから 19 世紀にかけて進展した科学の制度化の一例として見ることができる。科学史研究では、ゼンケンベルク博物館のような、公共に開かれた自然誌コレクションの設立と拡充は、研究に従事する専門職集団の登場や専門学会の成立と並んで、近代科学の制度化の進展を示すものと見られてきたからである。こうした近代科学の成り立ちをたどる歴史叙述の中では、特に公共コレクションが整備される過程は、国家権力が自然科学研究への関与と介入を強めてゆくプロセスと絡めて描かれてきた。つまり、経済的に有用な動植物や鉱物の知識を求める国家と、研究への財政支援を求める自然誌研究者が手を組んだ結果、国家の後援を受けた自然誌研究が興隆し、世界中から集められた標本を収蔵するために、各地に大規模な博物館が作られたと言うのである。そうしたコレクションの典型的な例として挙げられるのが、1793 年に創立されたフランスの国立自然誌博物館と、1753 年に国が買い上げたコレクションを中核に発足したブリティッシュ・ミュージアムである。とりわけパリの博物館では、館長をつとめたジョルジュ・キュヴィエ (Georges Cuvier, 1769-1832) の指揮のもとで標本の組織的な収集と分析が進められ、その研究成果と膨大なコレクションは、フランスの国力と威信を体現するプロジェクトとして革命政府の全面的な支援を享受した<sup>2</sup>。そして、こうした自然誌と国家の共益的な関係の成立には、当時の帝国主義が深く関わっていた。イギリスのジョセフ・バンクス (Joseph Banks, 1743-1820) の経歴が示すように、自然界の動植物や鉱物の標本を集め、その特徴を捕捉し分類する自然誌研究者は、植民地経営の水先案内人として

---

<sup>2</sup> R. Fox, *Science, Industry, and the Social Order in Post-revolutionary France* (Aldershot: Variorum, 1995); D. Outram, *Georges Cuvier: Vocation, Science, and Authority in Post-revolutionary France* (Manchester: Manchester University Press, 1984).

重用されたのである<sup>3</sup>。そして自然誌研究者もまた、各国の対外進出に伴って世界中に張りめぐらされた軍事的・政治的なネットワークを彼らの研究に利用したのである<sup>4</sup>。

このように、自然誌の公共コレクションをめぐる歴史叙述では、国家権力や帝国主義の関与が大きく取り上げられてきた。こうした歴史的な理解を否定することは、本稿の意図するところではない。実際に、パリやロンドン、ベルリンやウィーンといった、ヨーロッパ各国の首都に作られた大規模な国有コレクションについては、この2つの要素の介在抜きには語ることはできない。むしろここでは、そうした国有コレクションの影で見過ごされてきた、また別のタイプの公共コレクションに光を当てたい。19世紀のヨーロッパには、上述のゼンケンベルク協会の博物館のような、民間の団体が所有する公共コレクションが多数存在していた。ドイツ語圏の場合、有力な都市には必ずといっていいほど、そうした博物館が1つはあったと言っても過言ではないが<sup>5</sup>、こうした施設に関する研究は近年端緒に着いたばかりである<sup>6</sup>。そこ

---

<sup>3</sup> J. Browne, 'Biogeography and Empire,' in N. Jardine, J. A. Secord and E. C. Spary (eds.), *Cultures of Natural History* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996), pp. 305-21; M. Dettelbach, 'Humboldtian Science,' in N. Jardine, J. A. Secord and E. C. Spary (eds.), *Cultures of Natural History*, pp. 287-304; M. L. Pratt, *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation* (London: Routledge, 1992).

<sup>4</sup> 例えば D. P. Miller, *The Royal Society of London 1800-1835: A Study in the Cultural Politics of Scientific Organization*, Ph.D. Dissertation, University of Pennsylvania (Ann Arbor, Mich.: University Microfilms International, 1981) の第1章を参照。

<sup>5</sup> A. Daum, *Wissenschaftspopularisierung im 19. Jahrhundert. Bürgerliche Kultur, naturwissenschaftliche Bildung und die deutsche Öffentlichkeit, 1848-1914* (München, Oldenburg, 1998) が、85-118頁で当時のこうした自然科学結社の活動を概観している。ドレスデンの事例研究としては、D. Phillips, 'Friends of Nature: Urban Sociability and Regional Natural History in Dresden, 1800-1850,' *Osiris* 18 (2003): 43-59 や同 *Acolytes of Nature. Defining Natural Science in Germany, 1770-1850* (Chicago/London: University of Chicago Press, 2012) がある。

<sup>6</sup> 前掲注の Daum や Philipps の他に C. Goschler, 'Wissenschaftliche "Vereinsmenschen". Wissenschaftliche Vereine in Berlin im Spannungsfeld von Wissenschaft und Öffentlichkeit, 1870-1900', in C. Goschler (Hrsg.), *Wissenschaft und Öffentlichkeit in Berlin, 1870-1930* (Stuttgart: Franz Steiner, 2000), S. 31-63; A. te Heesen, 'Vom naturgeschichtlichen Investor zum Staatsdiener: Sammler und Sammlungen der Gesellschaft Naturforschender Freunde zu Berlin um 1800', in A. te Heesen and E. Spary (Hrsg.), *Sammeln als Wissen. Das Sammeln und Seine Wissenschaftsgeschichtliche Bedeutung* (Göttingen: Wallstein, 2001), S. 62-84; L. K. Nyhard, *Modern Nature. The Rise of the Biological Perspective in Germany* (Chicago/London: Chicago University Press, 2009); L. K. Nyhart, 'Civic and Economic Zoology in

で本稿では、フランクフルトのゼンケンベルク博物館を事例に、こうしたコレクションに関する試論を行ってみたい。具体的には、まず前半でゼンケンベルク博物館が自然誌研究の拠点として台頭するきっかけになった、ある調査収集旅行を考察した上で、後半ではフランクフルトという都市にとって、ゼンケンベルク博物館のような公共コレクションがどのような有用性を持ったのかを、同時代の記述を手がかりに分析したい。

## 2. リュッペルのアフリカ調査旅行

1830年代から世紀中葉にかけての一時期、フランクフルトのゼンケンベルク博物館は、ヨーロッパでも5本の指に数えられる自然誌コレクションだった。例えばブリティッシュ・ミュージアム改革委員会の顧問として、各国の博物館を視察したイギリスの鳥類学者ジョン・グールドは、1830年代のゼンケンベルク博物館について、次のような所見を残している。

フランクフルトの哺乳類のコレクションはブリティッシュ・ミュージアムのもよりも優れている、と私は考える。標本の数ではなく、  
[中略] 四足動物の良質な[標本]の点でだ。特に北アフリカ産のものについては、フランクフルトに匹敵するコレクションはなく、パリのコレクションでさえ、これには及ばない<sup>7</sup>。

ゼンケンベルク博物館の展示室に並ぶ北アフリカの動物標本には、当時のヨーロッパには2つとない希少なものも多かった。つまり、グールドが認めているように、ロンドンはおろか、当時最高峰とされていたパリの自然誌博物館でさえ敵わないコレクションが、この頃のフランクフルトにはあったのである。

---

Nineteenth-Century Germany. The “Living Communities” of Karl Möbius’, *Isis*, 89 (1998): 605-30 等がある。また、ゼンケンベルク協会については、拙著 A. Sakurai, *Science and Societies in Frankfurt am Main* (London: Pickering & Chatto, 2013) の第1章も参照。

<sup>7</sup> *British Parliamentary Papers, House of Commons, Select Committee on the British Museum*, 1836, vol. 10, p. 134.

ゼンケンベルク自然研究協会は、フランクフルトの医師フィリップ・ヤーコプ・クレツシュマー (Philipp Jacob Cretzschmar, 1786-1845) の呼びかけに応えて地元の自然誌愛好家たちが創立した、自然誌研究のための結社である。ちなみに協会の名は、フランクフルト市民に無償で医療を行なう病院などを私財で創設した、18世紀の裕福な医師にちなんだものである<sup>8</sup>。彼ら16名の創立メンバーは、それまでも勉強会や標本採集など、折りに触れては集まる仲間だった。このように同好の士の会として始まった協会が、ほんの10数年でヨーロッパ有数のコレクションを持つ研究拠点に急成長したのは、ひとつに会員の1人から寄付された大量の自然誌標本のためだった<sup>9</sup>。

ゼンケンベルク博物館に収められた動植物の大半は、フランクフルト生まれの旅行家・収集家エドゥアルト・リュッペル (Eduard Rüppell, 1794-1884) が、アフリカで集めたものだった。同博物館の所蔵品のカタログが初めて作られたのは、1840年代になってからだったが、その時点でもリュッペルが寄贈した標本は、哺乳類コレクションの約6割、爬虫類と両生類の約半数、魚類の約8割を占めていた<sup>10</sup>。そうした寄贈標本の中核を占めたのは、例えばキリンやカバ、カモシカなどのような、入手が難しく希少な大形哺乳類の標本だった。

1794年に、フランクフルトでも屈指の資産を持つ、貿易商兼銀行家の嫡男として生まれたリュッペルは、22歳になるまでは典型的なフランクフルト商人として育った。家業を継ぐことを前提に育てられたリュッペルは、16才でギムナジウムを中退し、実家の銀行を手始めにフランスやイギリス各地の銀行で見習い修行についたのである<sup>11</sup>。ところが1816年、彼は研修先のロンドンで体を壊し、医師に結核で余命数年と診断されてしまう。そこでリュッペ

---

<sup>8</sup> W. Kallmorgen, *Siebenhundert Jahre Heilkunde in Frankfurt am Main* (Frankfurt am Main: Moritz Diesteiweg, 1936), S. 144.

<sup>9</sup> 19世紀のゼンケンベルク協会の活動については、詳しくは Sakurai, *Science and Societies* を参照。

<sup>10</sup> 哺乳類標本535点中310点(57.9%)、爬虫類・両生類標本の45%が彼の寄贈品だった。R. Mertens, *Eduard Rüppell. Leben und Werk eines Forschungsreisenden* (Frankfurt am Main: Waldemar Kramer, 1949), S. 169.

<sup>11</sup> 中等教育を受けた後、10代で家業の見習い修行につくのが、当時の商家の跡継ぎとして典型的な経歴だった。Mertens, *Eduard Rüppell*, S. 16-8.

ルは、幼い頃から好きだった鉱物や動植物の研究をして、残り短い人生を過ごすそうと決めたのである。(この時の医師の見立ては誤りで、リュッペルは90才の長寿を全うした。)

リュッペルがアフリカ旅行を志すようになったのは、1817年、療養のためにエジプトのアレクサンドリアを訪れた際に、アフリカ旅行家のルートヴィヒ・ブルクハルト (Ludwig Burckhardt, 1784-1817) と出会ったためだった<sup>12</sup>。スーダンを2回訪れた経験を持つブルクハルトから、当時ヨーロッパ人には未踏の地だったスーダン奥地の動植物を調べことを勧められたのである<sup>13</sup>。その翌年、いったんフランクフルトに戻ったリュッペルは、早速旅行の準備に着手する。まずは、既に故人だった父親の事業を売却し、莫大な資金を手に入れた。またこの時に、彼は創立されたばかりのゼンケンベルク協会に入会している。そして、続く5年間、彼はイタリアのパヴィア大学とジェノヴァ大学に留学し、調査旅行に必要な鉱物学や地質学、天文学や地理学などを学んだのである<sup>14</sup>。

リュッペルは2度、調査旅行のためにアフリカに渡っている。第1次調査旅行(1822-1827)では、ナイル川上流域からシナイ半島、アカバ湾を経てスーダンに入り、ヨーロッパ人としては初めてスーダン中央部のコルドファンに到達している<sup>15</sup>。そして第2次調査旅行(1831-1834)では、主にエチオピアの高原地帯で標本の収集を行った<sup>16</sup>。2度の調査旅行にかかった費用を、リュッペルは総額6万グルデンと見積もっているが、その全額を、彼は自分の資産からまかなっている<sup>17</sup>。そしてこの旅行で収集した自然誌標本を、リュッペルは全てゼンケンベルク博物館に寄贈したのである<sup>18</sup>。とはいえ、

---

<sup>12</sup> A. Knoblauch, 'Die Stifter der Senckenbergischen Naturforschenden Gesellschaft. Biographische Notizen, anlässlich der Jahrhundertfeier zusammengestellt', *Bericht über die Senckenbergische Naturforschende Gesellschaft* 48 (1919): 55.

<sup>13</sup> Knoblauch, 'Die Stifter,' S. 55.

<sup>14</sup> *Ibid.*

<sup>15</sup> 'Rüppell, Wilhelm Peter Simon Eduard,' in W. Klötzer (Hrsg.), *Frankfurter Biographie* (Frankfurt am Main: Waldemar Kramer, 1994), Bd. 2, S. 223-5.

<sup>16</sup> *Ibid.*

<sup>17</sup> Knoblauch, 'Die Stifter,' S. 57.

<sup>18</sup> *Ibid.*, S. 55. なお、リュッペルは1849-50年に再びアフリカを訪れているが、この旅は調査旅行ではなかった。'Rüppell, Wilhelm Peter Simon Eduard,' S. 223-5.

協会は完全に無償でコレクションを手に入れたわけではなかった。リュッペルとの契約に従って、協会は調査旅行に必要な装備と助手を用意した上で、標本をエジプトからフランクフルトまで輸送するための送料を支払うことになっていた。そのため、高額な輸送費を負担した協会は財政的に逼迫し、一時は後援者からの募金で急場をしのぐほどになったのである<sup>19</sup>。それでもリュッペルの寄贈品には、出費に見合うだけの価値があった。数10点の新種を含む、貴重な標本を所蔵するようになったおかげで、ゼンケンベルク博物館は、各国の研究者が閲覧や照会のために訪れる、自然誌研究の拠点になったのである。

2度のアフリカ調査旅行の内、本稿では第1次調査旅行に注目したい。その主な目的地だったスーダンには、当時、繰り返し調査隊が派遣されていたことが示すように、西欧諸国、特にイギリスから強い関心が向けられている地域だった<sup>20</sup>。例えば上述のブルクハルトは、イギリスのアフリカ協会の後援を受けてエジプトに渡航し、イスラム教徒の商人に変装して、1812年と1814年の2度スーダンに潜入している<sup>21</sup>。1820年頃にはイギリス人の旅行家ジョージ・ワディントン (George Waddington, 1793-1869) がナイル川を遡上してスーダンに入り<sup>22</sup>、リュッペルとほぼ同時期の1820年から1825年にかけては、ベルリンの王立科学アカデミーとプロイセン王家の出資を受けて結成された調査団が、アフリカ北西部とアラビア半島の調査のために派遣されている<sup>23</sup>。プロイセン調査団の主な目的は考古学的な調査だったが、同行した2人の自然誌研究者、クリスティアン・エーレンベルク (Christian Ehrenberg, 1795-1876) とヴィルヘルム・ヘンプリヒ (Wilhelm Hemprich, 1796-1825) は

---

<sup>19</sup> W. Kramer, *Chronik der Senckenbergischen naturforschenden Gesellschaft 1817-1966* (Frankfurt am Main: Waldemar Kramer, 1967), S. 231-4.

<sup>20</sup> E. Rüppell, *Reisen in Nubien, Kordofan und den peträischen Arabien vorzüglich in geographisch-statistischer Hinsicht* (Frankfurt am Main: Wilmans, 1829), S. vii.

<sup>21</sup> 'Burckhardt's Travels in Africa,' *The North American Review* 40 (1835): 477-510.

<sup>22</sup> W. P. Courtney, 'Waddington, George (1793-1869)', rev. E. Baigent, *Oxford Dictionary of National Biography* (Oxford: Oxford University Press, 2004) [<http://www.oxforddnb.com/view/article/28373>, accessed 3 Sept 2013].

<sup>23</sup> *Bericht über die Naturhistorischen Reisen der Herren Ehrenberg und Hemprich, durch Aegypten, Dongola, Syrien, Arabien, und den östlichen Abfall des Habessinian Hochlandes, in den Jahren 1820-25* (Berlin: Druckerei der Königlichen Academie der Wissenschaften, 1826).

別行動を取り、中部スーダンで動植物標本の収集を行っている。

このように国際的にも関心を寄せられていたスーダンだったが、政情は安定せず、ヨーロッパ人には極めて旅しにくい地域だった。1820年にはエジプト総督メフメト・アリ・パシャ (Mehmed Ali Pasha, 1769-1849)<sup>24</sup> が、スーダンを支配下に置くために、三男イスマイル・パシャ (Ismail Kamil Pasha, ?-1822) と女婿アブディム・ベイ (Abidin Bey al-Arnaut, c.1780-1827)<sup>25</sup> 率いる軍を派遣している<sup>26</sup>。このエジプトのスーダン侵攻そのものは、東部地方を支配していたフンジュ・スルタン国を併合し、さらに西方のダール・フル・スルタン国からその最東部の州コルドファンを割譲させたことで一応の終結を見ている。こうして1821年には、アブディム・ベイが初代スーダン総督に就任したが、翌1822年にイスマイル・パシャがスーダン北部の都市シェンディーで暗殺されたことで、現地の勢力との対立が再燃し、以降数年に渡って各地で反乱が止まず、治安が悪い状態が続いたのである<sup>27</sup>。

このように混迷した状況にあったスーダンに、リュッペルは1822年、助手を1人連れただけで入り、その後の約2年半で、北部の主要都市ドンゴラを拠点に、青・白ナイル両流域を中心に北西部の調査を行っている<sup>28</sup>。さらに1824年末から1825年春にかけては、ヨーロッパ人としては初めて中部スーダンのコルドファン地方に入ることに成功した<sup>29</sup>。このように、戦乱が続いていたにも関わらず広範な地域を踏査し、煩雑な準備や処理を伴う<sup>30</sup> 自然誌

---

<sup>24</sup> 人名については、史料ではトルコ語表記が使用されていたため、それを踏襲してトルコ語で表記した。

<sup>25</sup> Bey はオスマン・トルコの高官、地方長官などの官職にある者に付ける肩書き。Pasha は一部の軍人、高官に与えられる特権的称号である。

<sup>26</sup> 栗田禎子『近代スーダンにおける体制変動と民族形成』(大月書店、2001年)、53頁。

<sup>27</sup> 例えば 'Burckhardt's Travels in Africa,' p. 504.

<sup>28</sup> 具体的な足取りについては、Rüppell, *Reisen in Nubien*, S. 6-10.

<sup>29</sup> *Ibid*; 'W. P. Eduard S. Rüppell,' *Proceedings of the Royal Geographical Society and Monthly Record of Geography, New Monthly Series* 8 (1886): 654.

<sup>30</sup> 動物の場合、狩りの人手が必要だった上、収集した動植物標本は、腐敗や虫による食害を防ぐために、すぐに処理する必要があった。特に煩雑だった動物の具体的な処理方法については、例えば F. Leven, *Anweisung zum Abbalgen, Ausstopfen und Conserviren der Vögel, Säugethiere, Fische und Amphibien, für Naturforscher, Sammler auf Reisen und Liebhaber, nach eigenen vieljährigen Versuchen und Erfahrungen* (Heidelberg: Hoffmeister, 1844) を参照。



標本の収集を大規模に行った点で、リュッペルのスーダン調査旅行は当時高く評価された<sup>31</sup>。ほぼ同時期に渡航したプロイセンの調査団で、上述ヘンブリヒを始め調査団に参加した者が複数病没し、収集品を積んだ船が難破するなどの不運が続いたこともまた、リュッペルへの評価につながっていた<sup>32</sup>。

公刊された旅行記では、リュッペルは地誌や動植物の描写に徹しているため、彼の現地での具体的な行動をうかがい知ることはできない<sup>33</sup>。しかし別の史料からは、彼がこれほどの成果を上げることができた、また別の理由が浮かび上がってくる。彼が現地からゼンケンベルク協会に宛てて綴った書簡が、フランクフルトの文芸誌『イリス』に1825年から翌26年にかけて連載されたが、そこからは、リュッペルがスーダンで軍政を敷きつつあったエジプト軍を一貫して利用している様子が分かるのである。

1822年の年始、カイロに到着したリュッペルが手始めにしたことは、現地の最高権力者に接触することだった。メフメト・アリ・パシャに謁見したリュッペルは、スーダンを調査する許可を求める前に、当時エジプトが支配下に置いたばかりのアラビア半島のアカバにある金鉱の調査を請け負っている。約半年をかけた調査で期待通りの成果を上げたリュッペルは、その見返りとしてメフメト・アリから調査旅行に対する許可と支援を手にしたのである<sup>34</sup>。スーダン入りした後も、できる限り多くの現地高官や有力者の好意を得るように、リュッペルは抜け目なく立ち回っている。フランクフルトから持参した贈り物を渡すのはもちろん<sup>35</sup>、時には彼自身が持つ知識や教育を武器に、軍事顧問めいた活動さえ行っている。例えば、エジプト軍の総指揮官

<sup>31</sup> 'W. P. Eduard S. Rüppell,' p. 654; H. Schmidt, 'Gedächtnisrede auf Dr. Eduard Rüppell, gehalten bei dem Jahresfeste, den 31. Mai 1885,' *Bericht über die Senckenbergische naturforschende Gesellschaft in Frankfurt am Main* (1884-1885): 135-43.

<sup>32</sup> *Bericht über die Naturhistorischen Reisen.*

<sup>33</sup> 地誌の描写が中心の Rüppell, *Reisen in Nubien* と、ゼンケンベルク協会の会員が編纂した自然誌研究の Senckenbergische naturforschende Gesellschaft (Hrsg.), *Atlas zu der Reise im nördlichen Afrika I. Abtheilung, Zoologie* (Frankfurt am Main: Brönnner, 1826-30) がある。

<sup>34</sup> リュッペルがメフメト・アリから得た支援については、具体的な内容は不明である。また、金鉱調査に関する具体的な情報は、エジプト側の機密として、リュッペルの書簡でも後に公刊された旅行記でも伏せられている。'Nachrichten von der Senckenbergischen naturforschenden Gesellschaft,' *Iris*, Nr. 249, 16. Dec. 1825, S. 995.

<sup>35</sup> 'Nachrichten von der Senckenbergischen naturforschenden Gesellschaft,' *Iris*, Nr. 260, 31. Dec. 1825, S. 1037.

として反乱の鎮圧にあっていたメフメト・ベイ (Mehmed Bey Defterdar, 生没年不明) が、エジプトの高官には珍しく学術研究に関心を持ち、とりわけ地理学には造詣が深いことを知ると<sup>36</sup>、リュッペルは彼の軍が使用する地図の改善に協力し、彼の歓心を買ったのである。

彼は私にこの地図の下書きを見せ、彼が利用した資料について正確な情報を伝えた上で、必要な訂正を行うように私に要請した。私はすぐに取りかかった。そして、この地図上の2地点、すなわちグルカブとアブクルについては、自分で正確に測定したことがあり、また何度も試算した結果、ラクダで35日かかる旅程が緯度1度分に相当することを知っていた上、メフメト・ベイも全ての距離をそれ〔ラクダでかかる日数〕で表記していたので、私は地図を改善することができた。そして私は、ナイル以南の、北緯19度から11度の地域について正確な知識を提供できたものと信じている<sup>37</sup>。

正確な地理情報が、軍事行動や物資の補給に不可欠だったことは言うまでもないだろう。このメフメト・ベイと並んでもう1人の高官が、リュッペルの後援者、そして「私の尊敬すべき友人」<sup>38</sup>として、彼の記述にくり返し登場する。メフメト・アリの腹心であり、スーダン侵攻軍の総司令官の1人でもあったアルバニア系の軍人、アブディム・ベイである。なお、1822年に初代スーダン総督に就任し、エジプト領スーダンの統治者となったのもこの人物である。例えば1824年9月には、助手の体調不良やラクダの病気が重なってドンゴラに足止めされてしまったリュッペルに、アブディム・ベイは援助の手を差し伸べている。

ドンゴラに〔カイロから戻って〕着いたところ、私のラクダが全頭病

---

<sup>36</sup> メフメト・ベイもまた、アブディム・ベイ同様にメフメト・アリ・パシヤの女婿である。‘Nachrichten von der Senkenbergischen naturforschenden Gesellschaft,’ *Iris*, Nr. 5, 7. Jan. 1826, S.19.

<sup>37</sup> *Ibid.*, S. 19-20.

<sup>38</sup> Rüppell, *Reisen in Nubien*, S. 9.

気にかかっているのを見た時の、私の苦境を想像してみてください。それに加えて、砂漠で滞在したせいで [助手の] ヘイが体調を崩し、寝台を離れられなくなってしまったのです。アブディム・ベイは - 彼には多方面で多大な恩があるのですが - 彼は今回も私を危難から救ってくれました。彼がヘイ氏を彼自身の住まいに泊めてくれたおかげで、回復の途上にある彼をドンゴラに残して [私は出発することができたのです]。さらに [アブディム・] ベイは、彼自身が所有するラクダを 14 頭譲ってくれたのです<sup>39</sup>。

このように現地で築いた人脈のおかげで、リュッペルは調査の際にエジプト軍から相当の支援を受けることができた。例えば、スーダン東部を流れる青ナイル川の流域を調査したり、かさばる標本をカイロまで輸送したりするために、彼はエジプト政府が所有する川船を利用している<sup>40</sup>。スーダンでのリュッペルの同行者は、助手の他には現地で雇ったヨーロッパ人の猟師と数名のアラビア人の使用人や案内人、さらに労働力として現地で購入した黒人奴隷が 2 人で、護衛を雇っている形跡はない<sup>41</sup>。これは、治安が悪い地域を調査する時に、エジプト軍の保護を受けることができたからだった。例えば 1824 年 2 月の彼の記述からは、反乱軍との交戦地帯を移動する際には、エジプト軍に同行することで安全を確保し、さらに調査に隊を離れる時にも護衛として騎兵隊を利用している様子がうかがえる。

あらゆる不運の最中、トルコ軍と一緒にいるという自分の幸運をありがたく思わなければならないでしょう。幸運にも、というよりも偶然にも、彼らはちょうど奇妙な場所に野営しています。[中略] クルゴスの近くにある私たちの野営地のほど近くには、古代盛期の廃墟がある

---

<sup>39</sup> 'Nachrichten von der Senkenbergischen naturforschenden Gesellschaft,' *Iris*, Nr. 255, 24. Dec. 1825, S. 1018.

<sup>40</sup> 'Nachrichten von der Senkenbergischen naturforschenden Gesellschaft,' *Iris*, Nr. 260, 31. Dec. 1825, S. 1037.

<sup>41</sup> 'Nachrichten von der Senkenbergischen naturforschenden Gesellschaft,' *Iris*, Nr. 255, 24. Dec. 1825, S. 1020.

のです。反対側の、ナイル川の東岸にあるために、私は長いこと、この厳かな廃墟に近付くことができないまま、ずっと目前にあるのを眺めていました。住民は皆土地を去り、敵軍が間断なく巡回しています。やっと私は、その一帯を調査するために、私に十分な数の騎兵隊を護衛に付けてくれるよう、軍の指揮官を説得することができました。けれども私に許された時間は非常に短く、私は全てをおおざっぱにしか観察することができなかつたのです<sup>42</sup>。

リュッペルがスーダンでの調査旅行を成功裏に終わらせることができたのは、彼が現地の政治情勢を利用し、エジプト軍の関係者の間に人脈を広げることができたからだだった。こうしたリュッペルの現地での行動が、彼の調査旅行が国家の権益や利害とは離れたところで企画されたことと関係していたのかどうかという問題については、史料の制約があるので、ここでこれ以上踏み込んだ議論をすることはできない。ただ、イギリス政府の非公式の後ろ盾を受けていたブルクハルトや<sup>43</sup>、プロイセン政府に派遣されてきたエーレンベルクやヘンプリヒの場合、彼のような行動は確認できなかったことと、次に示すようにリュッペルの記述から、彼が自分の調査旅行は同時代の他の試みとは性格が違っていると認識していたことだけは、付け加えておきたい。それでは次項では、リュッペルの調査旅行の動機と目的を掘り下げて行くことで、ゼンケンベルク博物館のコレクションがフランクフルトでどのような価値を持っていたのかを考察したい。

### 3. コレクションの価値

帰国から数年経って刊行された旅行記の中で、リュッペルは自身のアフリカ旅行を、次のような言葉で表している。

---

<sup>42</sup> ‘Nachrichten von der Senkenbergischen naturforschenden Gesellschaft,’ *Iris*, Nr. 260, 31. Dec. 1825, S. 1037.

<sup>43</sup> ブルクハルトが後援を受けたアフリカ協会は、王立地理学会の前身のひとつであり、政府関係者と強い繋がりをもっていた。H. R. Mill, *The Record of the Royal Geographical Society 1830-1930* (London: Royal Geographical Society, 1930), pp. 5-9.

ヘンプリヒ氏とエーレンベルク氏の、鋼のような勤勉さと驚嘆すべき知識のおかげで学問が得たような成果を、私の旅から期待できるのではと考えるような、私が思ってもみないような考えを持つ者さえた。両氏が発見したものは、国王が費用を用立てるような、アフリカの科学的な調査旅行に彼らを派遣した学者たちの選択眼の誉れとなるようなものだった。比較するのは何と見当違いなことだろう。誰でも見て取れるように、私の主たる功績といえ、社交生活の魅力を遠ざけるかわりに、自分の財産と時間の一部を父なる町の博物館を飾るために使ったことにすぎないのだ<sup>44</sup>。

エーレンベルクとヘンプリヒという、いわばプロイセンの旗を背負って調査を行った2人を引き合いに出すことで、リュッペルは、自分はいくまでフランクフルトの博物館を豊かにしたい一心でアフリカに向かったにすぎないと強調している。つまり、見栄えの良い標本を故郷の博物館に持ち帰るために一個人として行った自分の旅は、エーレンベルクたちの、国庫の後援を受けて行われた学術的な調査旅行とは、本質的に違うのだとわざわざ断りを入れているのである。2つの調査旅行の動機の違いをはっきりさせることに彼がこれほどこだわったのは、この違いが、ゼンケンベルク博物館の存在意義に関わる根本的なものだったからである。

リュッペルが「飾る」という言葉を選んでいることが示唆するように、ゼンケンベルク博物館のような公共コレクションは、その町の住民の多くにとっては、何より町に華を添えて町の名声を高める手だてとして意味を持つ存在だった。例えば1829年に文芸誌『イシス』に掲載されたリュッペルの『北アフリカ調査旅行地図書』の書評には、そうした公共コレクションの象徴的な価値を論じている一節がある。

この種のコレクションのりっぱなものがあり、それに盛んに手を加えられていることが周知のところでは、学問に心を開いている公共心

---

<sup>44</sup> Ruppell, *Reisen in Nubien*, S. 5.

(Gemeinsinn) と、従って個人的な関心を越えた教育が存在すると常に結論付けることができるのである。なぜなら個人が一つ所で学問をいかように後援しようとも、こうした現象は共同の教育の証左ではないのだ。いやむしろその反対のことを〔証拠立てるものだ〕。〔中略〕なので、都市の名声にとって、共同の事業と公共のコレクション - 書籍であろうと絵画であろうと、自然科学標本や実験器具や機械であろうと - ほどにその試金石となるものはないのだ。公共のものだけが〔後の世に〕残りうるので、真実の価値があるのだ<sup>45</sup>。

コレクションの質と量さえ優れていれば、何を集めたものかは二の次だと言わんばかりのこの記述は、極論かもしれない。しかし一方でこの史料は、当時フランクフルトのような都市で、公共コレクションのこういった側面が重視されていたのかをよく示しているだろう。公共コレクションの豊かさ、つまり質の高さや所蔵品の貴重さ、規模の大きさ、さらには金銭的な価値に換算した場合の金額の大きさなどが、文化的な「公共心」の高さを測る尺度として重視されていたのである。

公共コレクションが、都市住民の公共心の高さを示すとされたのは、ひとつにそのほとんどが、町の富裕市民から寄せられる寄付金や寄贈品に支えられていたからだった。ゼンケンベルク協会も、その例にもれない。毎年の会計記録に見る限り、協会の財政規模はさして大きいものではなかった。会員が支払う年会費(年 11 グルデン)からの収入は、平均すると 1 年あたり 3,300 グルデン前後だった。他には、町のギムナジウムの生徒に自然誌の講義を行う代わりに、政府から年 1,500 グルデンの補助金が支払われていた<sup>46</sup>。同時代のギムナジウム教師の年俸が 1,400 グルデン前後だったことを考えると<sup>47</sup>、5,000 グルデンに満たない収入は、ささやかなものと言えるだろう。そしてこの収入では、博物館の光熱費や助手の人件費、博物館建設の際の借入金の返

---

<sup>45</sup> ‘Atlas zu der Reise im nördlichen Africa v. E. Rüppell,’ *Isis* (1829): 100.

<sup>46</sup> *British Parliamentary Papers, House of Commons, Select Committee on the British Museum*, 1835, vol. 12, p. 492.

<sup>47</sup> E. Heyden (Hrsg.), *Galerie berühmter und merkwürdiger Frankfurter* (Frankfurt am Main, Brönnner, 1862), S. 250.

済など、博物館と協会の運営にかかる恒常的な経費をまかなうのがやっとなかった<sup>48</sup>。そのため、博物館の建設や改築<sup>49</sup>、標本の入手や購入といった、不定期の大きな出費が必要になった際には、協会はもっぱら後援者から集められる寄付に頼っていたのである。実際、1852年にリュッペルが協会に宛てた書簡の中で認めているように、「当地の自然誌コレクションはすべて、寄贈品だけで成り立って」<sup>50</sup>いたのである。

フランクフルトに関して言えば、市民の寄付を元に設立された公共コレクションは、ゼンケンベルク博物館だけではなかった。例えば、今も町に残るシュテューデル美術館（Städel'sches Kunstinstitut）は、裕福な商人であり、美術品の蒐集家でもあったヨハン・フリードリヒ・シュテューデル（Johann Friedrich Städel, 1728-1816）が、美術館の建立・維持と絵画購入の資金として13万グルデンという莫大な資産を遺贈したのが始まりである<sup>51</sup>。また、1828年に完成し、新古典様式のファサードがマイン河畔のランドマークになった図書館の新築費用の大半は、当時のドイツ語圏で最大の出版業者だったヨハン・カール・ブロナー（Johann Karl Brönnner, 1738-1812）と、ゼンケンベルク協会が発足した時からの後援者でもある銀行家モーリッツ・フォン・ベートマン（Moritz von Bethmann, 1768-1826）が用立てている<sup>52</sup>。

リュッペルが調査旅行の行き先にスーダンを選んだことから、フランクフルトのような町では博物館の価値がどう決められるのかを、彼がよく理解していたことがうかがえる。まだ十分な調査がされていないスーダン内奥部、特にコルドファンにおもむいたことで、フランクフルトの博物館は、ヨーロッ

<sup>48</sup> E. Rüppell, Brief an die Senckenbergische naturforschende Gesellschaft, 4. Aug. 1852, Nr. 41, Naturmuseum Senckenberg, Frankfurt am Main.

<sup>49</sup> 博物館建設にかかった費用は33,500グルデンだった。この時は、当初集まった寄付金8,630グルデンでは足りず、協会は不足分を借入金でまかなった。Kramer, *Chronik*, S. 207-12.

<sup>50</sup> E. Rüppell, Brief an die Senckenbergische naturforschende Gesellschaft, 4 Aug. 1852, Nr. 41, Naturmuseum Senckenberg, Frankfurt am Main.

<sup>51</sup> R. Roth, *Stadt und Bürgertum in Frankfurt am Main: ein besonderer Weg von der ständischen zur modernen Bürgergesellschaft* (München: Oldenbourg, 1996), S. 56; P. Eich, *Stadel Art Institute and Municipal Art Gallery: Frankfurt am Main* (München: Magazinpresse, 1986), pp. 10-3.

<sup>52</sup> Roth, *Stadt und Bürgertum*, S. 39, 125, 169-70, 286; 'Philipp Heinrich Alexander Moritz von Bethmann, in W. Klötzer (Hrsg.), *Frankfurter Biographie. Personengeschichtliches Lexikon* (Frankfurt am Main: Waldemar Kramer, 1994), Bd. 1, S. 63-4.

パに2つとない貴重な標本を数多くそのコレクションに加えることができ、短期間でその評価を上げることができた。こうしたリュッペルの、いわば戦略的な収集へのアプローチを端的に示していたのが、彼が「自分の念願」<sup>53</sup>とまで呼んでいたキリンに対する執着だった。当時のヨーロッパでは、キリンはコルドファンの高原地帯に生息していることで知られていた<sup>54</sup>。コルドファンへの出発が目前にひかえる1824年の終わり頃、リュッペルはゼンケンベルク協会に宛てた書簡で、「それではコルドファンへの私の旅について少々書こう。かの地での私の唯一の目的は、キリンを手に入れることだが、私はいくばくかの期待を抱いている」<sup>55</sup>とその意気込みを示しているように、良質のキリンの標本は、多くの博物館が手に入れたいと望むもののひとつだった。エーレンベルクたちがキリンを手に入れようとアブディム・ベイに掛け合っていたことや<sup>56</sup>、リュッペルのコルドファン行きがフランクフルト地元の雑誌で、強い関心をもって報道されたことから<sup>57</sup>、キリン獲得に対する当時の関係者の関心の高さがうかがえるだろう。

このように、リュッペルとゼンケンベルク協会の会員たちの望みは、フランクフルトに他所よりも抜きでた自然誌のコレクションを作り、町の公共心の高さを他に知らしめることだった。注意を要するのは、コレクションの優劣をはかる際、引き合いに出されるのが他の「都市」だったという点である。例えば前掲の『イシス』誌の書評には、そうした競争関係にある都市の名前が具体的に挙げられている。

---

<sup>53</sup> ‘Nachrichten von der Senkenbergischen naturforschenden Gesellschaft,’ *Iris*, Nr. 40, 25. Feb. 1826, S. 158.

<sup>54</sup> 実際には他の地域にも生息しているが、当時キリンの生息地として知られていたのがコルドファン地方だった。 *Ibid.*, S. 158-9.

<sup>55</sup> ‘Nachrichten von der Senkenbergischen naturforschenden Gesellschaft,’ *Iris*, Nr. 15, 4. Feb. 1826, S. 100.

<sup>56</sup> ‘Nachrichten von der Senkenbergischen naturforschenden Gesellschaft,’ *Iris*, Nr. 40, 25. Feb. 1826, S. 159 の記述からは、ドンゴラを訪れたエーレンベルクとヘンブリヒが、キリンとカバの標本を手に入れるために、アブディム・ベイと交渉していたことがうかがえる。しかし彼らは結局、標本を手に入れることはできなかった。

<sup>57</sup> ‘Nachrichten von der Senkenbergischen naturforschenden Gesellschaft,’ *Iris*, Nr. 15, 4. Feb. 1826, S. 95.



ジュネーブがあらゆるヨーロッパの共同体（*Gemeinwesen*）の上にそびえるのはそのためである。途方もないことをやりとげたからではなく、住民皆が個々の境遇と知識に応じて自らのもの〔である財産や知識〕を学問の涵養に供したからであり、人類の究極の目標である、一般の教育のために皆が一致して努めているからである。ジュネーブと競う都市は、ドイツには2つあるのみだ。それはブレーメンとフランクフルトである。ハンブルクは、肩を並べることを諦めた。そしてじきに、その地位はゴータに引き継がれるだろう。これは、共同の事業には、自由都市だけが適しているわけではないという証拠である<sup>58</sup>。

こうした同時代人の認識は、国家間の競争やナショナリズムを強調する博物館の歴史叙述とは大きく食い違うものである。彼らが意識していたのは町と町の競争であって、例えばフランスとイギリス、プロイセンとオーストリア、といった国と国の競争ではなかった。言い換えると、文化に対する意識の高さ、つまり「公共心」を巡る競争は、例えばフランクフルトの場合は、同格をみなされていたジュネーブやブレーメンといった都市との間で繰り広げられたのである。当時のフランクフルトが、自由都市という特殊な立場だったことも、「都市」が競争の単位として強く意識された一因だろう。フランクフルトは14世紀以来、帝国都市として主権を持つ都市国家だった。ナポレオン戦争で神聖ローマ帝国が消滅すると、自由都市に名称が変更されたものの、都市国家としての立場に変わりはない<sup>59</sup>。しかし、同じく都市国家だったブレーメンやハンブルク、ジュネーブといった都市ばかりが競争相手として意識されていたわけではなかったことは、ザクセン＝コーブルク＝ゴータ公国の首都ゴータが上記の引用に登場していることからわかるだろう。

こうした都市間の公共心を巡る競争という文脈の中に置いてはじめて、本稿の冒頭に置いた宣言を理解することができるだろう。この宣言がされた1832年は、ゼンケンベルク博物館の名声が絶頂に達していた時期だった。

<sup>58</sup> ‘Atlas zu der Reise,’ S.100.

<sup>59</sup> R. Roth, “... der blühende Handel macht uns alle glücklich ...” Frankfurt am Main in der Umbruchszeit 1780-1825,’ *Historische Zeitschrift Beiheft* 14 (1991): 357-408.

スーダンの動植物コレクションに加えて、前年、第2次調査旅行に出発したリュッペルがエチオピアの高原地帯で収集した標本も、間もなく到着する予定だった。第1次調査旅行の成果に優るとも劣らない、貴重な動植物標本が手に入ることが見込まれていたのである。このエチオピアの動植物標本が加われば、ゼンケンベルク博物館の評価は、他には類を見ない北東アフリカの動植物コレクションとして盤石のものになる。となれば、フランクフルトの公共心の高さを証明するというゼンケンベルク協会の使命は果たされたも同然なので、今後は現状の維持を課題とするべきだ、という会員の判断に基づいて上記の宣言はされたのである。

このようにフランクフルトの事例の分析からは、18世紀末から19世紀はじめにかけて国有の大規模なコレクションが次々と登場する中で、地方の協会や結社が維持する相対的に小規模なコレクションがどのような立ち位置を選び取っていったのかを知ることができる。全世界の動植物と鉱物に関する情報の集積庫として、桁違いの財源や人材を与えられた国有コレクションは、際限なく拡大する道をたどった。このように巨大化する一方の国有コレクションの価値が、包括的であるか否かの一点で計られたのに対し、ゼンケンベルク博物館のような民間のコレクションの価値を計る尺度はひとつではなかった。北東アフリカの動植物標本に特化できたことに満足し、それ以上のコレクションの拡大を望まなかったゼンケンベルク協会の判断からは、そうした評価の多面性をうかがうことができる。例えばパリやベルリンの博物館では当然とされた、より包括的なコレクションを目指して手薄な分野の標本を充実させてゆくという選択肢は、フランクフルトでは無用のものとされたのである。なお、ザクセン王国の自然科学結社に関するフィリップスの研究からも、おのおの独自の基準でコレクションの拡充をすることにこだわる自然誌協会の存在を確認することができるので<sup>60</sup>、こうした状況はフランクフルトのような都市国家に限られたことではないと考えられることを付け加えておきたい。

ちなみに民間のコレクションのこうした独自路線からは、労働集約的とも

---

<sup>60</sup> Philipps, *Acolytes of Nature*, pp. 188-9.

呼べる国有コレクションに対する、やや屈折した危機感ものぞく。スーダンから帰国した後、ライデンの国立自然誌博物館を訪れる機会があったリュッペルは、1820年に設立されたばかりの博物館で、標本が整然と分類されて専用の陳列棚に展示され、部門毎に専任の研究者が標本の維持管理に当たっている状況を目の当たりにして衝撃を受け、それと引き比べてあまりに見劣りするゼンケンベルク博物館の現状を「おもちゃ屋」だと嘆いてもいるのである<sup>61</sup>。

#### 4. おわりに

19世紀前半のヨーロッパでは、国立の博物館はまだ少数派だった。当時存在した自然誌博物館のほとんどは、都市に活動の拠点を置く民間の団体や協会が運営しているものだった。ゼンケンベルク博物館もそのひとつだったが、このような都市に密着した民間団体が運営するコレクションを、国有のコレクションとは区別する意味で、ここでは都市型コレクションと呼びたい。国有コレクションに重心を置いた歴史叙述に対して、本当に当時の状況を反映しているのかという疑問を抱いたことから、ここではそうした都市型コレクションを理解するための試論を展開してみた。博物館の展示室に並ぶ標本を集めるために行われた調査旅行もまた、公共コレクションの歴史叙述と似た問題を抱えている。こうした調査旅行は、ヨーロッパ人の帝国主義的な世界進出という枠組みで理解されることが多かったが、本稿ではそうした概念的な枠組みに落とし込むことなしに理解する方策を探ってみた。その結果、都市間のコレクションの優劣を巡る競争を念頭に置いて、戦略的な標本収集活動を行うリュッペルの姿が浮かび上がってきた。

とはいえ本稿は、リュッペルの企画が帝国主義的な要素と無関係に行われたと示唆したいわけではない。彼が集めた標本やスーダンについての知識が

---

<sup>61</sup> E. Rüppell, Brief an P. J. Cretzschmar, Leiden, 3. Sept. 1828. Mertens, *Eduard Rüppell*, S. 340に引用。フランクフルトでは慢性的な資金不足から、棚やラベルの作成といった展示室の整備が追いつかず、雑然とした状況が世紀終わり頃まで続いた。Sakurai, *Science and Societies* の第1章を参照。

学術的にも評価されたのは、その前提としてスーダンに対する各国の関心があったからである。ただ、結果的に帝国主義的な企図に利用されることになったとしても、当事者の動機やローカルな文脈で特定のコレクションが有した価値までも「帝国」という枠組みに還元するべきではないだろう。むしろ、こうしたローカルな言説を掘り起こすことで、自然誌に同時代人が関与する際の動機の多様性に光を当て、理解する方が建設的だろう。

都市間の対抗意識と科学の制度化の関係については、例えばペニーが帝政期ドイツの文化人類学的なコレクションについてすでに指摘している<sup>62</sup>。しかし、18世紀末から19世紀はじめにかけて自然誌博物館が拡充されていった過程を理解する枠組みとしても、自然誌的な調査旅行も含めて考察を深める必要があるのではないだろうか。国家間の競争だけでは、国立の博物館をはるかに上回る数の博物館が各地方に設立されたことも、その多くが長期にわたって活動を続けたことも説明しきれないことは確かである。その意味で、研究の視座をよりローカルな文脈に置きなおす時期に来ているのではないだろうか、と提言することで結びに代えたい。

---

<sup>62</sup> H. G. Penny, 'The Civic Uses of Science: Ethnology and Civil Society in Imperial Germany,' *Osiris* 17 (2002): 228-52; H. G. Penny, 'Fashioning Local Identities in an Age of Nation-Building: Museums, Cosmopolitan Visions, and Intra-German Competitions,' *German History* 17 (1999): 489-505.